

## プロローグ

一九八×年九月二日付東京日報第十四版第二社会面より抜粋

挙式目前 マンションから飛び降り自殺

一日午後三時十分ごろ、東京都A区三好町二丁目のパレス大倉マンション（六階建）の屋上から若い女性が飛び降り、全身を強く打って死亡した。

綾瀬警察署の調べでは、この女性は同マンションに住む加藤文恵さん（24）。同マンションの屋上には高さ約一・五メートルの手すりがあり、加藤さんはこれ乗り越えて約十五メートル下の路上に飛び降りるところを目撃されている。

加藤さんは一週間後に結婚式を控えており、遺書はなく、同署では動機について調べている。

同年十月九日付夕刊紙「アロー」第二版社会面より抜粋

今日午後二時四十五分ごろ、営団地下鉄東西線高田馬場駅のホームから若い女性が飛び降り、進入してきた中野行き快速電車にはねられ死亡した。

死亡した女性は埼玉県K市千石町二丁目コーポ川口に住む会社員、三田敦子さん（20）で、ホームにいた利用客が三田さんの行動に気づき、制止しようとしたが間に合わなかった。遺書は発見されていないが、戸塚警察署では現場の状況から自殺と判断し、動機を調査している。

平明で客観的な報道記事からは、ある事件・事故の関係者もしくは現場に居合わせた人たちの受けた衝撃の全てをうかがい知ることはできない。読者はそこで何が起こったのかわかることはできても、そこに何が残ったのかわかることはない。

読者は知らない。加藤文恵が路上に向けて飛び降りたとき、そこに居合わせて干した布団を叩いていた主婦を知らない。彼女は、加藤文恵が、何かに追いかけられているかのように早足で階段をのぼり、屋上を横切り、フェンスをよじのぼり始め、下に落ちていくまで、そ

の一部始終を見ていた。そしてそのあと、フェンスに近づいた彼女が、冷たい銀色の金属に触れ、それからあわてて手を放したことを、読者は知らない。彼女が、まるでその手すりが加藤文恵を招き寄せて上らせ、下に落とすように感じたことを知らない。

読者はまた、鑑識課員たちが路上に散らばった加藤文恵の脳味噌を手で拾い集めてビニール袋に入れたことも知らない。マンシヨンの管理人がホースで水をまいて血を洗い流し、そこに塩をまいたことも知らない。加藤文恵その人が、死の直前に誰かと電話で話をしていたことも知らない。

また、三田敦子を助けようとした中年のサラリーマンのことも知らない。彼はそのとき、自宅の住宅ローンの借り換えがスムーズに進むかどうか考えていたところだった。三田敦子は彼の前をフラフラと通りすぎ、背後から来る何者かを気にしているように二、三度振り向くと、ホームの端に足を踏み出した。

サラリーマンはとっさに彼女の薄い上着の襟首をつかんだ。もしそのとき、三田敦子がきちんと上着のボタンをとめていたなら、きっと彼が彼女を助け得ただろうことを、読者は知らない。電車が金属音をたてて三田敦子をひいたとき、呆然とホームにたたずんだ彼の手に残った上着のなめらかな感触を知らない。三田敦子が飛び込む前、同じホームにいた老人の利用客に時刻表を読んでやっていったことも知らない。その老人が帽子をとって彼女に礼を言い、階段をあがっていったことも知らない。

事故の処理に手間がかかったのは遺体が飛散していたためであり、もつとも発見の遅れた彼女の頭部が、電車を徐行でバックさせたとき、一両目と二両目の連結器の間から、湿った音をたてて落ちたことも知らない。そのとき、三田敦子の両目がぼつかりと暗くあきつぱなしになっていたことも知らない。これらのすべては行間に埋もれ、いずれは忘れ去られていくだけのものなのだ。

そして今――

記事を読んで事件を知った多くの人たちの知らない場所で、一人の若い娘が、友人二人を乗せて走り去っていくタクシーに手を振って見送っていた。

本当なら、マンシヨンの前まで車をつけて欲しかった。そう言ってみればよかったと、静まり返った路上で彼女は後悔していた。

大丈夫、走って帰ればほんの二、三分だもの、大通りで落としてくれればいいわ。友人に言ったその言葉を、彼女は頭のなかで繰り返した。大丈夫、なにも怖がることなどない。

青ざめた街灯の光の下に、人けのない道路が延びている。角を一つ折れて、交差点を一つ渡る。百メートルもありはしない。彼女は歩き出した。

角を曲がる直前で、腕時計のアラームが鳴った。音楽会場や映画館できまり悪い思いをするときと同じように、静寂のなかで妙に大きく響く音だった。

そのとき、彼女は思った。うしろから、誰か来る。

足を速める。背後の気配もスピードをあげて迫ってくる。

彼女は肩越しに振り向いた。路上には誰もいない。それでいて、彼女は追われていると感

じていた。逃げなければ恐ろしいことになる。捕えられたら恐ろしいことになる。

どやしつけられたように身体を震わせて、彼女は駆け出した。

髪を乱し、靴音を響かせながら、彼女は走った。息が詰まって声が出せなかった。ただ走って、走って、走った。逃げて逃げて逃げ続けた。

うちへ、うちへ、うちへ。安全な場所へ。

誰か助けて。

そのまま足を緩めず、赤信号が輝く交差点に飛び出したとき、痛いほどまぶしいヘッドライトの光とともに、救いは最悪の形でやって来た。

同じ夜同じ空の下で、一対のこぎれいな手が大判のスクラップ・ブックを開いていた。

スクラップ・ブックの見開きの右側のページには、きつちりと切り取られた二人の女性の死亡記事が、ていねいにのりづけしてあった。漂白されているように白いその手は、細い指を伸ばし、二つの記事を軽く叩いた。

加藤文恵。三田敦子。

左側のページには、サービスサイズのカラー写真が一枚、貼りつけられていた。黒ぶちの眼鏡をかけ、白い歯並びを見せて笑っている、若い男の顔写真だった。

どこかで時計が午前零時を知らせた。

白い手はスクラップ・ブックを閉じ、明りを消した。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。